

ICT活用と起業体験で自立した女性へ

第35回時事通信社「教育奨励賞 努力賞受賞校」②

●瀧野川女子学園中学高等学校(東京都)

「ごきげんよう」。あいさつとともに生徒たちがおもむろに机にタブレット型端末を出し、授業が始まった。閑静な住宅地の中に、立地する私立瀧野川女子学園中学高等学校(山口治子校長、生徒数404人)。「真に世界に貢献できる近代女性の育成」を理念とした中高一貫校だ。教室には黒板がなく、代わりに大きなディスプレイが設置されている。クラスメートと会話や議論をしながら進める授業は、普段目にするものとは大きく異なっていた。最先端の情報通信技術(ICT)を使用し、実社会で活躍できる女性を目指す姿を目指している。(肩書等は取材時)

さかのぼること1926年。関東大震災が発生した3年後の復興特需のさなかに、瀧野川実科女学校は開校された。創設したのは、教員出身の5人の子育て中の主婦。当時37歳のこの女性こそが創立者の山口さとり氏だ。当時は、男子校や花嫁学校があったものの、女学校という存在はまれだった。経済復興で女性の進出が顕著になってきた時代に「女性が望むような人生を手に入れることのできる学校を作りたい」という一心で、自宅の2階を開放して女学校を始めたことがきっかけ

だ。

現存する職員日誌には「男性社員より劣る理由は何か」ということや「財務、経営の知識の必要性」などが記されており、女性の社会進出をどうすべきかが議論されていたことがうかがえる。当時は、女性の大学進学はほとんどなく、就職が大半だった。いったん、会社に入ってしまったら、学歴は関係ない。そこで、財務や経営の知識を身に付ければ、職場内で男性と互角に仕事ができると思ったという。



iPadを使って授業を受ける生徒たち(瀧野川女子学園中学高校提供)

当時から、授業形式はユニークだった。教員が

教壇に立つて講義するのではなく、教員が生徒の中に入って一緒に実践するという方式を採っていたという。授業の形を変えていくのかを考えたのが2010年。そして15年、もう

一度創設の理念に立ち戻って、最新の技術と合致させるとどうなるのだろうかと考えた結果、ICTを活用した授業、常識にとらわれない教え方を採り入れることになった。

数学は「コミュニケーション」

教科書での勉強といえば、基礎から応用の順となるが、教科書によっては、それがどのように世の中とつながっているのかは、生徒の多くは分かりにくい。副校長の山口龍介氏は「数学はその典型だと思う」と説明する。瀧野川学園では「数学(学問)はコミュニケーションの道具」として教えている。

具体的には、体積や面積、方程式など、言葉として表現できないものを、誰かに伝えるために「公式」を使用すると生徒には教えている。さらに、授業も一連の塊で教えている。例えば、1次関数から3次関数までを方程式という一つの単元として教えている。つまり、中学校1年生から高校2年生(5年生)までの授業内容を一気にならせてしまう。

さらに、授業中は、他の生徒と話し合って解答を導く。全生徒にiPad(アイパッド)と専用のペンシルが配られており、板書はすべて教員がiPadに配信したプリントのデータを用いて進めていく。山口副校長は「年頃の生徒にしゃべらずにじっとしていなさい、と言う方が難しい。ならば、先生と生徒と一緒に会話をしながら問題を解く方が、分かりやすい」と話す。

生徒に行ったアンケートによると、数学が「嫌い」よりも「好き」が8割ほどという結果を出している。

教員にもメリットがある。タブレットを使用することで、生徒がつまづいているところや、悩んでいるところをリアルタイムで気付くことができる。時には、特定の生徒のタブレットに赤でアドバイスを書き込むなどし、授業での「分からない」「止まらない」「ほっておかない」を解消できる。

全教科で、こうした取り組みを行った結果、1年かけて行うはずだった日本史の授業内容が半年で終了したり、50分程度の授業内容が12分で終了してしまったりと、予想外の展開が続出した。こうしたことを踏まえ、「今までやりたくてもできなかった教育ができるようになった」と山口副校長は語る。

こうした取り組みにより、高校2年生（5年生）では「ゼミ」と呼ばれる授業を行う。この授業は選択制で、取らずに自習を行うことも可能になる。

時事問題を掘り下げて探究する生徒や、歴史を深く学ぶ生徒など、自分が知りたいことを自分で調べて勉強する。「旧制学校の名残がある」と山口副校長は話す。

さらに、今般の新型コロナウイルス対策にも、日ごろのICTを活用した授業が功を奏し、教員の8割が在宅勤務しながら、生徒は自宅で自身のタブレットで学習した。こうした取り組みを行ったことで、勉強の遅れなどの懸念は払拭されてい

る。

実社会への授業を実施

中高6年間の必修科目として「創造性教育」を実践している。株式会社の仕組みを、より実践的に学習するのが目的だ。仲間と株式会社をつくり、どうしたら利益が出るのかを、実践的に授業の中で行う。

具体的には、高校2年生（5年生）で行うハワイ大学でのチャリティーバザーへの出品に向けて動く。ここでは、集大成として、1チーム15人で出資し、模擬会社を設立する。そこで「まだ、この世にない新しい商品や事業を展開する」をテーマに、各会社の「商品」を生み出していく。

ウェブ広告を作ったり、学校の説明会で実際にプレゼンテーションをしたりして、顧客のニーズの動向を見るところ。ハワイ大のバザーの前哨戦である学園祭にも出店し、反省点や改善点を見つけてするなど、そのやり方はまさに企業そのものだ。

バザーでの売り上げは、女性のための現地団体への寄付を行っており、社会貢献も学ぶことができる。「自分が株主になることで、企業の仕組みが分かり、新規事業を立ち上げることの難しさや楽しさを学ぶことができる」と山口副校長は語る。

英語が話せない悔しさなどの体験が、勉強をしなくてはいけないという気持ちにつながり、高校3年生（6年生）の大学受験までに、ほとんどの生徒の成績が上がるという。

また、授業を通常の学校よりも早く終えている

ことや、こうした経験から、将来や大学進学のことを、高校3年生の時にじっくりと考えることができる。一連の改革を進め、全体的に見ると生徒の勉強時間が増えていることが表れている。

こうした6年間の取り組みにより、話す能力、考える能力、伝える能力が自然と身に付く。このことから、大学のAO入試や推薦入試に強くなっていく。

ペーパーテストだけではなく、自分から発信する力を育むことができるようになる。成し遂げた事、社会の望む事を両立させた自分を形成することができ、大学教授などと対等な話ができるようになる。実際にこうした方法が生かされ、7割を超える生徒が一般入試ではなく、新しい入試形式で、現役合格を達成している。

さらに、学問だけをするのではなく、部活動も盛んだという。めりはりの利いた学習や、意思を持った生徒が多く育つため、部活動でも真剣に取り組む。「良い意味で手を抜くところは手を抜く。だが、それだけではなく、自分が達成したいことや探究心、好奇心に火が付くと止まらなくなる生徒が多い」（山口副校長）。

改革が始まって5年。山口副校長は「女性であること、自分のしたいこと、そしてそれを実現するにはどうしたらよいかという、学園の原点に立ち返った学習法が、こうした結果につながっている。生徒たちのこれからの成長に期待したい」と、熱い思いを語った。

（町田敦子 立川支局、前内政部）